

第3部 中世から近代へ

中世後期、とくに12世紀以降ヨーロッパが発展に向かい、新しい旅も始まっていたことは中世の章で述べた。中世は「古代の復興」(ルネサンス)によって終わるのだが、この時期は地理上の発見と宗教改革が並行して行われた激動期であった。ルネサンスは、中世から近代への曲り角の時期である。俯瞰的に見れば、古代ローマ帝国滅亡から15世紀のルネサンスの深化に至るおよそ1000年近くが中世と呼ばれるが、仔細に見れば、始まりは古代ローマ帝国の滅亡期とするとして、終わりのほうはルネサンスの始まりをいつと見るかによって中世後期の風景が違って見える。というより、そもそも明確にラインを引くことはできないのであろう。ルネサンスは突発的に生じた事件ではなく、ヨーロッパ人の精神面に生じていく変化の過程とその結果の現れであって、その兆しから成熟までに数世紀かかった出来事だからである。L. フェエーヴル著「フランス・ルネサンスの文明」の序文の言葉を借りれば、「知の追求、美の追求、聖なるものの追求。要するにこの三つこそ、《ルネサンス》と《ユマニスム》と《宗教改革》とを生き、かつ築いた当時の人間の情熱的営為の精髓を最もよく特徴づけ要約するもの」なのであった。

本章では、ヨーロッパが停滞の中世を脱していく時代の旅を扱うが、あまり年代にはこだわらず、中世的とされるカトリック教会の知的支配からの脱出に焦点を当てて旅の展開を見てみたい。14世紀から16世紀にかけての時代は、まさに中世から近代へと向かって激しく動いた時代であった。

樺山紘一「異郷の発見」は、13世紀に入るとヨーロッパはそれまでの内向きの姿勢を脱しはじめ、彼らにとっての「異郷」発見へ向ったと書く。ひとつは空間的な異郷としての「東方・アジア」の発見であり、もうひとつは時間的な異郷としての「古代」(ローマとギリシャ)の発見であった。これらの発見は、いずれも知的好奇心や探究心を抑圧されてきた700年余の「暗黒の中世」の夜明けを告げるものであった。

第一の空間的異郷の発見は、教皇の使節派遣で始まる具体的かつ実用的な地理的・地誌的知識の拡大であった。この時以来の陸路による東方の発見と、およそ100年後に始まるポルトガルとスペインの先駆的大西洋探検によって、ヨーロッパは人類史上初めて「世界」を視野に入れる。ヨーロッパによる「地理上の発見」ないし「大航海時代」と呼ばれる時代の到来である。

他方、樺山が「時間的異郷」とする古代の再発見は精神的革新を指し、歴史上ルネサンスおよび宗教改革と呼ばれる新時代への胎動となった。第二の時間的異郷の発見のほうには社会全体の変革、具体的には精神面から近代化へ向う道にほかならず、18世紀の啓蒙主義の時代を経て、政治革命としてのフランス革命とイギリスが主導する産業革命とへとつながっていく。ゆえに、時間的異郷の発見については、近代ツーリズムを準備する社会的文化的背景として、第3章「ルネサンスと宗教改革時代の旅」で取り上げることとし、まず、異郷「東方」の発見から大航海時代へと向うヨーロッパの変身ぶりを見ていくこととする。

第1章 異郷「東方」の発見

十字軍の海路輸送が地中海海運の発展を大きく刺激したことはすでに述べた。数次にわたる十字軍遠征とその結果である十字軍（ラテン）国家を経由する外界との接触は、内向きだったヨーロッパ中世の眼を次第に外に向けさせていった。それまで、中世ヨーロッパ人が知る外の世界はごく限られたものに過ぎなかった。8世紀以降、アフリカもアジア方面もイスラム世界に隔てられていて、彼らの具体的な地理的知識は、シリアやパレスチナより先にはほとんど及んでいなかった。

この時期までのヨーロッパの東方・アジアに関する知識は、史書によれば、大まかなところで、①アレクサンドロス3世の東方遠征の伝説を膨らませた諸種の空想物語（アレクサンドロスものと呼ばれる）、②使徒の一人聖トマスによるインド伝道伝説、③東方のどこかに強大なキリスト教君主国があって、イスラム教徒を挟撃してくれるという希望的空想物語「プレスター・ジョン伝説」、の3つの空想譚が提示する漠然たるイメージにとどまっていた。イスラムの商人や学者たちが書き残したインドや東南アジア方面についての記録はヨーロッパには伝わっておらず、地理的知識としては存在しないも同じだった。

十字軍に次いで内向きのヨーロッパの目を覚まさせたのは、モンゴル帝国によるヨーロッパ遠征であった。防壁となるはずのポーランド・ドイツ連合軍が大敗し、危機感を抱いた教皇や諸侯によってモンゴルに使節が派遣され、彼らの持ち帰った報告によって最初に本格的な東方・中央アジア方面の知識がヨーロッパにもたらされた。その後モンゴルが中国に元王朝を建てると、ヴェネチアの商人であったマルコ・ポーロが中国まで行く。ポーロがフビライ・ハンのもとに長期滞在してその体験をまとめたものが「東方見聞録」に結実し、多くの新知識をヨーロッパにもたらした。「東方見聞録」を読んだコロンブスが同書から刺激をうけ、西回りでインドに到達しようという冒険的試みへと背中を押されたことはよく知られている。

プレスター・ジョン伝説 ジョン・ラーナー（野崎嘉信・立崎秀和訳）「マルコ・ポーロと世界の発見」は、マルコ・ポーロ以前のヨーロッパ人の東方に関する知識を詳しく検討し、整理している。中世に膨れ上がったアレクサンドロスのインド征服物語や、聖トマスのインド伝道伝説について解説した上で、これら古来の伝説をすべて採り入れた形で「プレスター・ジョン」伝説が中世末期のヨーロッパ中に流布されていく経緯を説明する。時は十字軍の時代で、イスラムとの戦いに苦しむなか、心強い援軍を期待する気持ちがこの伝説を生み、かつ育てていったのであろう。

ラーナーの解説によれば、ことの発端は1122年にインドの大司教ジョン（ヨハネ）と称する人物がローマを訪れ、自分の職務に対して教皇の承認を求めたことにあった。このヨハネが教皇庁に出向いてインドについて行った講演というのが記録に残っている。ピシヨン（創世記に出てくる川、この場合インダス河）の河岸にあるフルナという大都市には熱心なキリスト教徒たちが住んでいる、12使徒にちなむ12の修道院が建てられ、聖トマスの祝日にはアジア中の信徒が聖トマス大教会に集まってくる、といった話であった。ラーナーによ

れば、これ自体は野心家による信用詐欺みたいな話だったのだが、23年後、12世紀のドイツの年代記作家フライジングのオットーなる人物が1145年の項に書き残した記述によって補強された形で再登場する。その記述とは、陥落した十字軍国家エデッサの回復を要請するために、シリアのジャバラ（ガバラ）司教が教皇エウゲニアス3世（在位1145～53）のもとに派遣されてきて、その司教から聞いた話として、前年の1144年にペルシャのイスラム教徒が、さらに東に住むネストリウス派の聖職者ジョン（ヨハネ）に打ち破られたと書き留めたものである。この記述によると、ジョンは東方の三博士につらなる血筋の者でペルシャ以遠を統治していたが、メディア人やペルシャ人を破り、キリスト教徒を助けるべくさらに進軍を企てたが、大軍団でティグリス河を渡河するのが困難であったため断念した、ということであった。イスラム教徒を破った軍というのは、領内にネストリウス派キリスト教徒が多く住む中央アジアのカラキタイ（西遼）の耶律大石がセルジューク・トルコの最後の王を破って覇権を立てたという事実が背景になっているとされている。

この材料を元に、アレクサンドロス大王の遠征譚や聖トマスのインド伝道伝説を適当に織り込んで、無名だが才能ある著述家が「プレスター・ジョンの書簡」という創造力豊かな作品を偽造した。ラーナーによれば、遅くとも1180年より前に書かれた創作であり、いくつもの言語による120種以上の写本が残されていて、当時のヨーロッパ人共通の教養となっていたことが窺われるという。

「プレスター・ジョンの書簡」というのは、プレスター・ジョンが教皇に宛てて書いたとされる手紙で、内容はつづめて言えば、自分は国王であり聖職者である、資源も国力も豊かで、強力な軍隊も持っている、イスラム教徒を打倒して聖地と聖なる墳墓を奪回するために遠征する用意がある、というものである。その結果、イスラムとの戦いにおける強力な援軍になり得るという期待とともに、見知らぬ東方に強大なキリスト教国があるという幻想が大いに膨らんでいった。しかし、根拠らしいものは発見されず、教皇が出した返書も梨のつぶてに終わる。中央アジアからアフリカまで、プレスター・ジョンの国を探し求めて裏切られ続けるのだが、予想に反してマルコ・ポーロどころか、コロンブスをさえ超えて、ヨーロッパ人に幻想的な希望を抱かせ続けたのであった。

池上俊一訳「西洋中世奇譚集」には、「プレスター・ジョンの書簡」がラテン語バージョンと俗語バージョンの2種の異なる写本の日本語訳が収録されている。俗語のバージョンは分かり易く、一般人でも読めるようにとの配慮が働いている。訳者解説によれば、この手紙が広く流布されだした13世紀以降、多くの「百科全書」や「旅行記」にプレスター・ジョンの名前とその不思議な王国が頻繁に登場するようになっただけでなく、この幻の王国の所在を求めて、実際に幾人もの冒険者がインドや東方に旅立って行ったという。

大航海時代の幕開けを準備するポルトガルのエンリケ航海王子や国王ジョアン2世もまた、アフリカのどこかにプレスター・ジョンの王国があると信じ、イスラムを迂回してこの王国を探索しようとしたのであった。

西欧からモンゴルへの使節団

13 世紀初頭にテムジン（チンギス・ハン）によって大モンゴル帝国が建国され、中央アジア全体に平和がもたらされたあと、1240 年代からほぼ 1 世紀の間、例外的に活発な東西交流がおこなわれた。樺山は、この時期にヨーロッパにもたらされた東方事情の報告を、第 1 期（モンゴル帝国の時代）と第 2 期（中国との接触期）にわけて紹介する。

最初の東西接触は、1240 年代はじめにモンゴルがヨーロッパ遠征を行なったことによっではじまった。チンギス・ハンの後継者オゴダイ・ハンが版図を西に拓けるべく大軍を派遣し、グルジア、アナトリア（トルコ）を制圧し、ロシア諸侯国を服属させ、黒海に隣接するステップ平原地帯を占領した。他方、東ヨーロッパに向った一隊はポーランド、シレジアにまで軍を進め、このモンゴル軍を迎え撃ったドイツ・ポーランド連合軍がリグニッツァの戦いで大敗し（1241 年）、モンゴル軍をせき止める砦がなくなってしまった。蹂躪されるままになったハンガリー王国のベーラ 4 世は、時の神聖ローマ皇帝フリードリッヒ 2 世（在位 1212~50）や西ヨーロッパ諸侯に支援要請の書状を送った。これがヨーロッパに新勢力モンゴルを強く意識させる最初のきっかけであった。モンゴル軍の残虐さが過大に伝えられ、住民は恐怖におののいたが、たまたまこの年オゴダイ・ハンが死んでモンゴル軍が引き上げたため、それ以上の侵略を免れることができた。

最初に行動を起こしたのはローマ教皇イノケンティウス 4 世（在位 1243~54）であった。教皇は 1245 年にフランチェスコ会修道士ジョヴァンニ・ピアン・ディ・カルピニを長とする使節団をモンゴルへ派遣したのである。使節団といってももう 1 名の修道士と通訳をかねたポーランド人修道士の 3 名だけであった。派遣の目的はモンゴル帝国の実情視察とモンゴル人へのキリスト教の布教の可能性、それにプレスター・ジョンの王国探索も含まれていた。カルピニらはクラコウからウクライナを経由してキプチャク草原を通過し、翌 1246 年に首都カラコルム（ハラホリン）に達している。ここでハンになったばかりのグユク・ハンに教皇の親書を手渡し、ハンの返書を携えて 1247 年に帰国して大部の報告書を残した。樺山は、同報告書は政治制度のみならず、生活様式、信仰と感情表現、モンゴルの歴史と現在などにわたって広汎に記述し、それ以前に権威ある文献が何ひとつない時代のモンゴル報告としては出色の出来であると評価している。

カルピニが帰国して 7 年後、今度はフランスのルイ 9 世（聖王ルイ）が、やはりフランチェスコ会修道士ギヨーム・ド・ルブルクをモンゴルのハンのもとに派遣した。ルブルクは出発前にカルピニに会っており、カルピニの知識を踏まえて、さらに詳細なモンゴル旅行記を残した。

この二人の報告は「中央アジア・蒙古旅行記」（護雅夫訳）によって日本語で読むことが出来る。同書には訳者の詳細な訳注と解説があり、ヨーロッパと西アジアとの初期の接触を事細かに紹介していて、同行の通訳担当の修道士の報告ともども大変興味深い。

カルピニの「モンゴル旅行報告」 カルピニの報告は 9 章に分かれ、1～4 章はタルタル（モンゴル）人の土地・人種・風貌、信仰・風習・婚姻などの説明に当てられ、第 5 章が

タルタル人の起源と興隆の歴史、第6～7章がタルタル人の戦いの仕方、講和の仕方、そして、第8章がそれらの知識を踏まえてタルタル人といかに戦うべきかが書かれ、最後の第9章で彼らの旅そのものが語られる。われわれの第一の関心は、旅の道程を説明した第9章にあるが、この第9章が分量では全体の3分の1を占め、最も生き生きと描かれた部分である。また、カルピニ自身の報告のほかに、同行した通訳のベネディクト会修道士による口述報告も付録として掲載されている。

両修道士の報告と訳者の丁寧な解説によって彼らの旅の概要をみると、カルピニはフランスのリヨンにいた教皇のもとを1245年4月16日に立出し、まず旧知のボヘミア王のところへ出向き、モンゴルへ行くのにどの道をとるべきかを相談する。ポーランドを出発点としてロシアを経由するのがよいとの助言を得てポーランドへ行き、ここからベネディクト修道士が通訳として同行、すでにモンゴルの支配下にあったロシアのキエフまで行った。カルピニはキエフの手前で瀕死の重病にかかったのを何とか持ちこたえ、酷寒の冬にキエフに到着したのだった。キエフから先は真に蛮族の地、西洋人には未知の大地となる。キエフの貴族たちの助言によると、ヨーロッパの馬をタルタル人の地に連れて行けばみな死んでしまうという。理由はタルタル人の馬のように雪の下の草を食べることを知らず、さりとてタルタル人は藁も干草もまぐさも使わないから、餌が手に入らないためだという。そこで馬は残し、贈物をして馬と護衛を世話してもらい、1246年2月3日未知の国へと旅立った。

道中の報告は詳細である。行く先々でモンゴルの族長らの世話を受け、案内されての旅であるが、その行く先々で贈物をせびられることに苦情を言い続けているのが面白い。彼らは教皇の使節であるから、馬と護衛（案内人）と宿泊・飲食の無料提供を受けるのは当然と考えているようだが、これを読む現代の我々は、サービスを提供する側が何がお礼を期待するのも無理はないと思ってしまう。ヨーロッパ内でなら無料で旅ができ、旅の世話に対価を求められるということはなかったのであろう。ともあれ、現地の支配者の世話を得なければ一歩も進めないなので、持っている限りの進物を与えながら旅を続けた。実際、行く先々で馬（1日4～5頭換えるのが普通だった）と護衛は惜しまずつけてもらっているが、食事は少量で粗末だったと不満を述べている。

カルピニの報告で異彩を放つのは、オゴダイ・ハンの後継者グユクの即位式に参加し、その模様を詳細に報告していることである。たまたま即位直前で、各地の族長たちが即位式に出向きつつあった時期だったためカルピニも同行し、7月22日、首都カラコルムに到着した。雹が降って式が延期されることなどがあって、即位式は8月24日になって行なわれた。その時に新皇帝に面談し（ただし直接に話してはいけない）、教皇からの親書を手渡すことができた。その後首都にさらに2ヶ月余滞在する。11月13日に帰国の許可が出て、ハンスの返書を携えてカラコルムを出発し、来た道を通って翌1247年6月9日にキエフに帰着いた。キエフでは《死者が戻ってきたような》大歓迎を受け、それ以後に通過したポーランド、ボヘミア、ドイツの行く先々で歓迎された。ドイツのケルンでライン川を渡り、晩

秋にリヨンの教皇のもとに辿りついた。2年半の長旅であった。

ヨーロッパ人にすれば、地の果てのような未知の中央アジアへの大旅行であり、情報収集しながらの旅であったが、それ以前にまとまった文献が皆無の中で作成された報告としては極めて具体的で詳細である。また、その体験は、序文に「わたしどもは、タルタル人またはそのほかの民に殺され、あるいは終生の監禁、さらにはまた、飢え・渇き・寒さ・暑さ・危害などなど、我慢しきれぬほどの非常な苦難にさらされるかもしれぬと、大層危ぶみました。たしかに、これらのうち、殺されることと終生の監禁とを除けば、あらゆる苦しみがいろいろのかたちで、また、われわれの予想をはるかに超えたひどさでわたしどもにおそいかかりました」（カルピニ）と述べているように、大変なものだったろうと想像される。この言葉がオーバーでないのは、その後も異郷に赴いた使節や冒険者らで旅の途中で亡くなった者や、現地の王から帰国の許可が得られず、その地に骨を埋めた人たちが多いことから十分に窺われる。

往路では、グユクの即位式に間に合うために、同行する族長一行も食事の暇も惜しんで馬を頻繁に換えて突っ走ったと書いている。オゴダイの時代に、首都カラコルムを起点として支配地に向けて八方にジャムチという駅伝制度が設けられており、これを使用したものと思われる。騎馬民族にとって草原は当時の高速道路だったといわれるが、山田信夫「草原とオアシス」によれば、騎馬の特使はカラコルムからハンガリーまでを3ヶ月で走破したという。

カルピニは、自分の報告が実際の見聞に基づく事実を記したものであることを強調し、報告の締めくくりは、旅の間に会ったり世話になったりしたジェノヴァやヴェネチアの商人を含む多くの人々の名前を列挙して、彼らが自分たちのモンゴル旅行が事実であることを証明してくれるであろうと言っている。また、当然の義務として自分は報告書を準備しているが、ポーランド、ボヘミア、ドイツ、さらにリエージュからシャンパーニュへと戻る途中に出会った人々が「報告書を欲しがり、まだ完成していないのに、さらには非常に省略したかたちでこれを書き写しました」が、それらは完全なものではなく、今のこの報告書こそ本物で、完全なものであると念を押している。

いずれにしても、中央アジアとモンゴルの実情を自分の目で見てヨーロッパに伝えたのは、このカルピニの報告書が最初であった。

ルブルクの旅行報告 既述のとおり、ルブルクはルイ9世によってモンゴルに派遣された。カルピニがリヨンの教皇の元に帰り着いた頃、ルイ9世は十字軍を率いてキプロスに旅立つばかりになっていた。護雅夫の解説によれば、教皇はルイ王が出発すると、対立する神聖ローマ皇帝フリードリヒ2世に自分が攻撃されるのではないかと心配し、時間稼ぎに帰国したばかりのカルピニ修道士とベネディクト修道士をルイ王のもとに派遣して出立を遅らせようとしたらしい。ルブルクはこのときにパリでカルピニらの話を聞き、自分もモンゴル人の土地に行きたいと考え、このあと4年間十字軍に赴くルイ9世と行動をともにしつつ見聞を広め、ますますその意志を固めたという。

護によれば、ルイ 9 世は結局 1248 年 9 月に十字軍を率いてキプロスに到着し、その 3 ヶ月後に在イランのモンゴル軍総指揮官イルチカダイから派遣されてきたダヴィッドという使節に会う。ダヴィッドの話は、ルイ 9 世を喜ばせるものばかりであった。曰く、ルイ 9 世も教皇もモンゴルではすでに有名である、モンゴルにはキリスト教徒が沢山おり、ハンの母后もキリスト教に改宗している、などといい、聖地回復のためのイスラムとの戦いを支援したいと申し出た。喜んだルイ 9 世は、イルチカダイとグユク・ハンの両者に向けて、ダヴィッドとの話を通訳したアンドルー修道士を長とする使節団を送った。アンドルー修道士は教皇がカルピニの次にモンゴルに派遣した第二次使節に同行した経験があったからである。アンドルーはダヴィッドを伴って 1249 年 2 月に出発した。しかし、カラコルムより大分手前のバルハシ湖まで来たところでグユク・ハンが亡くなったことを知らされ、そこに滞在中だった監国（摂政）の皇后に面会し、返書をもって引き返した。この間にルイ 9 世のほうは十字軍を率いてエジプトを攻めたが、大敗して捕虜になっていた。1250 年に釈放された王がパレスチナの町にいるときアンドルー使節が戻ってきて報告を受ける。ハンの返書は毎年年貢を送ることを求める高慢な内容で大いに失望するが、アンドルーのモンゴル報告によって、モンゴルの詳細な情報を得ることができた。その中でルイ王を喜ばせたのがプレスター・ジョンにまつわる話と、モンゴル人の首長サルタク（グユクと対抗したオゴディの甥バトゥの子）がキリスト教徒になっていると聞いたことであった。

このことからルイ王は、政治目的でなく宗教目的での派遣を考え、モンゴル行きを望んでいたルブルクを使節としてハンのもとへ送った。ルブルクの報告書と護の解説をもとにルブルクのモンゴル旅行の行程を見ると、ルブルクはルイ王の親書をパレスチナのアッコでアラビア語とシリア語に翻訳させ、アッコを海路出発してコンスタンチノーブルへ向っている。1252 年の早春にコンスタンチノーブルに到着し、しばらく滞在してさらに情報を収集し、モンゴル旅行の準備を整えて 1253 年 5 月 7 日コンスタンチノーブルを出発した。黒海を横断してクリミア半島のソルダイア（スダク）に上陸し、カスピ海の北方およそ 200km のところにあったサルタクの宿営を訪れた。サルタクの家臣たちとルブルク一行のやり取りは臨場感があって大変面白い。サルタクから自分の父親のバトゥ（反オゴディ家のリーダー）に会うよう勧められ、エティリア河のほとりにあるバトゥの宿営を訪れる。さらにバトゥからモンケ・ハンに会うように言われて東に向う。1253 年 12 月 27 日、カラコルムの東方にあったモンケ・ハンの冬の宿営地でハンに謁見し、ルイ王の親書を渡す。翌 1254 年 4 月はじめにカラコルムに着いて 3 ヶ月ほど滞在したのち、7 月はじめに帰途についた。

キプロスに帰り着いたのは 1255 年 6 月であった。ルブルクの帰国報告はカルピニよりはるかに分量も多く、序と終章を合わせれば 40 章にもものぼり、モンゴル人の生活習慣に係わる優れた観察を残している。特徴として挙げられるのは、第一にバトゥ対モンケ・ハンというモンゴルの内部抗争に巻き込まれそうになっている様が意図せずに描かれていること、第二は、キリスト教の異端ネストリウス派への詳細な言及である。中央アジアから中国にかけて多数のネストリウス派キリスト教徒が住んでおり、モンゴルのハンの周辺にもネス

トリウス派の官吏が沢山いる様が窺われる。ルブルクから見れば異端の宗派であるから彼らに対する批判と悪口が多く、伝説のプレスター・ジョンについては、ネストリウス一派の存在が大げさに伝えられただけで実体はないと報告している。具体的には、第 17 章で、草原のどこかにネストリウス派を奉じる部族があつて、その王がジョンを名乗っており、これが針小棒大に伝えられてヨーロッパで「プレスター・ジョン伝説」になったにすぎず、誰に聞いても何も知らなかったと書いている。

ルブルクに先立ってモンゴルに派遣されたアンドルー修道士も、アジアにプレスター・ジョンの国があることを否定しているし、さらに、マルコ・ポーロも明確に否定したことで、プレスター・ジョンの国がアジアにはないことが確認された。その後は、エチオピアとかアフリカ大陸内部など、アフリカのどこかに存在するという伝説となってさらに存続し、ポルトガルによる探検航海のきっかけのひとつになった。

マルコ・ポーロの「東方見聞録」

カルピニ修道士とルブルク修道士がモンゴルの首都カラコルムまで行き、これまで全く知られなかった中央アジアの情報がヨーロッパにもたらされた。しかし、中国については、ルブルクが東の果てにはキタイ（華北、中国のこと）という大国があると聞いた、と書き記しているだけである。

樺山のいうヨーロッパ人によるアジア見聞録の第 2 期は、いよいよ中国との接触である。モンゴルの勢力が中国に及ぶのは、フビライが元王朝を建てて中国全土を制圧した 1270 年代に入ってからである。言い換えれば、モンゴルの平和が中国に及んで、初めてヨーロッパと中国との間に往来がはじまった。この時期、十字軍を契機に地中海貿易が飛躍的な発展を遂げ、その延長線上に東方貿易への関心も高まっていた。前述の使節たちの旅行報告の中にも、ヨーロッパ商人の姿がちらほら窺えるが、中国を訪問した商人で個人名が明らかにされた最初の例がマルコ・ポーロ父子であり、フビライ・ハンの中国制覇の前後の時期に当たっている。かくして、マルコ・ポーロの「東方見聞録」は中世において最大の影響力を及ぼす一冊の書物となった。

画期的な書「東方見聞録」 「東方見聞録」（青木富太郎訳）の序章の記述を、同書の長澤和俊抄訳の解説・訳注で補強してマルコ・ポーロの東方旅行を要約すると、概要次のようになる。マルコの父ニコロ・ポーロとその弟マテオ・ポーロは、1260 年商機を求めてヴェネチアからコンスタンチノーブル経由海路クリミア半島のソルダイアまで行く。ここに滞在するうちにもっと先に行きたいと考えるようになり、キプチャク・ハン国のバルカ・ハンの宮廷へ行く。バルカ・ハンはポーロ兄弟を歓迎してくれたが、間もなくバルカ・ハンとレバント地方のイル・ハン国の王フラグ・ハンとの間に戦争が始まり、バルカが敗北してしまった。兄弟は来た道に戻る事が出来なくなり、迂回するつもりでブハラまで行つたが、ここで進むことも戻ることも出来なくなった。やむなくここに 3 年間滞在しているとき、フラグ・ハンが大ハン（フビライ）のもとに派遣した使節団と出会う。この使節団

から、フビライはヨーロッパ人を見たことがないから会えば喜ぶだろうと誘われたため、同行して北アジア・ルートで中国に入った。

フビライ・ハンはポーロ兄弟の来訪を歓迎し、ヨーロッパの皇帝・諸侯のこと、ローマ教皇や教会のことなどについて数々の質問を浴びせ、帰国する兄弟にローマ教皇宛の親書を託した。親書の概要は「キリスト教の教理に精通した者百名を派遣してもらいたい、大ハンの領土内にいる学者たちに、公明正大な論議をもって、キリスト教の信仰が他のいかなる信仰よりもすぐれ、タタール人の神々や家庭での偶像信仰が誤りであることを説明できるだけの人物が欲しい」というものであった。青木の解説によれば、フビライは、ネストリウス派（景教）の信者であった母の影響を受けてキリスト教世界に関心を持っており、自分の前に現れたニコロとマテオを親善使節として利用することを思い立っただけらしい。

1269年4月、兄弟がアークル（ハイファ付近）まで戻ってみると、教皇クレメンス4世（在位1265～68）は亡くなっており、後継の教皇がなかなか選ばれなかった（教皇空位時代）。やむなく在エジプトの教皇の全権大使（後継教皇に選出されてイノセント4世となる）の元へ行って親書を託し、兄弟は1269年中にヴェネチアに帰着した。

その2年後（1271年）、ポーロ兄弟はニコラの息子マルコを連れて再び中国へ向う。建設されたばかりの首都ハンバリク（大都、現北京）に到着したのは1274年（青木の推定）であった。マルコはフビライ・ハンに仕えて大都に17年間を過ごし、その間にハンの特使として中国各地を訪問し、見聞を広めた。1290年、イル・ハン国皇帝妃となってペルシャに赴くコガチン姫を送り届けかたがた海路帰途に着く。インド洋を経て西アジアに至り、ヴェネチアに帰着したのが1295年、ヨーロッパを出てから24年目の帰国であった。帰国後、ジェノヴァと祖国ヴェネチアとの戦争で捕虜になり、ジェノヴァの牢獄に囚われていた間に同僚の詩人・著述家ルスティケロがマルコの語った旅行譚を記録にとどめ、二人の合作として「東方見聞録」が成立した。



マルコ・ポーロの行程

「東方見聞録」の内容 以上が「東方見聞録」の序文にまとめられているマルコが語った冒険旅行の概要である。青木富太郎訳「東方見聞録」では、本文は6章にわかれ、第1章

がアルメニアからフビライの宮廷にいたるまでの国々、第 2 章から第 4 章がフビライ支配下の中国各地の国情、第 5 章が日本を含む近隣の諸島や帰途に通過した東南アジア諸島およびインドの紹介、第 6 章ではホルムズからトルコ、ロシア方面について語られる。ポーロの見聞録は旅のコースに沿って語られているのではなく、地域別の構成になっている。帰途は海路をとっているため、解説書に従って帰途の経路を概観すると次のとおりである。ザイトゥン（泉州）を船で出発し、ベトナムに寄港してからマラッカ海峡に入り、ジャワ島にそってインド洋に抜け、スリランカを経てインド西海岸に沿って北上し、ペルシャ湾口のホルムズで上陸する。その後は陸路イランを通過して黒海に至っている。各地の実情を書き記した内容は、黄金の国として伝え聞いたというチパングの話とともに、のちにポルトガルによるインド航路発見や、コロンブスによる西回りアジアへの探検航海の刺激となったのも当然であろう。

ポーロの見聞録の内容については、後世から見るといろいろ疑問点があり、そもそも彼は本当にこのような旅行をしたのかという疑問を呈する研究者さえいるという。しかし、一読してみれば、行った人にしか書けない内容であることは明らかである。ポーロ以前のヨーロッパ人のアジアや中国に関する知識は極めて漠たるもので、彼の「東方見聞録」がヨーロッパ人に膨大な新知識をもたらしたことは間違いない。

ジョン・ラーナー（野崎嘉信・立崎秀和訳）「マルコ・ポーロと世界の発見」は、様々な記述上の疑問をひとつひとつ吟味したうえで、「…中世後半には多くの商人や宣教師も同様に東洋を訪れているのだから、ポーロが東アジアで見聞したことを著し、中世で最大の影響力をもつ一冊の書物を生み出したということこそ、最も重要な点である」と書き、ポーロ以前にも以後にも、一人の人物がこれほど膨大な新しい地理上の知識をヨーロッパにもたらしたことはないと言明し、中世の地理学的な文献資料の中に、マルコ・ポーロの見聞録と同類の文献は 1 点も見当たらない、と強調している。（ラーナー p124）

マルコ・ポーロがヨーロッパにもたらしたものは、驚嘆すべき異国の品々、広範囲に及ぶ詳細な地誌、そしてそれ以前ヨーロッパには紹介されたことのなかった中国を含む地平の拡大であった。内容は彼以前・以後の修道士や宣教師たちによる冒険と怪異に満ちた物語ではなく、商人の目で見た具体的な情報であり、東方との商取引の手引きとさえ考えられるものであった。マルコがもたらした知られざる異郷の物語を、著述家であったルスティケロが網羅的な取材によって補い、人々にわかりやすい物語に仕立て上げるべく尽力したと考えられている。青木富太郎訳「東方見聞録」の訳者解説によれば、マルコはヴェネチアの父親に頼んで持ち帰った覚書やノートを送ってもらい、これらも参照してルスティケロが纏め上げたのだという。最初の出版は、ある刊本には 1298 年、すなわち捕虜として囚われていた間（1299 年に解放）に書かれたとされており、大体その頃に出たものと考えられている。

ポーロの「見聞録」は、写本が出回ると驚くべき速度でひろまり、愛読された。しかし、マルコ・ポーロの見聞録は、当時の人々にはあまりにも想像力を超えた物語であって、面

白おかしいだけの空想物語と同列に扱われ、その内容が地理学的地誌学的な知識として尊重されるのは 80 年ほどのち、14 世紀にマルコの足跡を辿った商人や宣教師たちの証言を待ってからのことになるという（p 192）。ポーロによる中央アジアの記述については、青木によれば、探検家のオーレル・スタイン（1862～1943）やスヴェン・ヘディン（1865～1952）らが中央アジアを探検するたびに必ず「東方見聞録」を持参し、踏査の結果を同書と比較してその正確さに驚いていたという。

マルコ・ポーロの東方見聞録が修道士らの見聞録と違うのは、修道士らが当時の知識人として教皇や国王に仕え、その側近としてハンのもとに派遣された外交使節であったのに対し、ポーロの見聞録は商人としての自発的な旅の結果であり、偶然の成り行きでフビライのもとに 17 年間に長期滞在した結果の自由な観察であるという点であろう。フビライは、彼の視察報告の正確さと豊富な情報を整理する能力に大いに感心し、新支配地中国の実情視察の使節として起用し続けたといわれる。彼がそれだけ優秀な観察力をもつ個性的な人物だったからであろう。

モンゴルの駅伝制度 モンゴルにジャムチと呼ばれる駅伝の制度があったことは多くの史書に言及されているが、その実態について書かれたものは多くない。シュライバーの「道の文化史」も『王の道』の章で簡単に触れているだけだが、マルコ・ポーロはここでも詳しく紹介し、商人らしい関心を示している。青木訳「東方見聞録」の第 2 章 17 には次のように書かれていて、オゴダイの時代にはカラコルム（ハラホリン）を基点にしていた駅伝制度が、マルコ訪問の当時は新首都ハンバリク中心に変わっていることが知れる。

ハンバリク（北京）から多くの道路と公道がいろいろの地方に通じ、各道路には行き先の名前がついているが、なかなか上手いやり方だ。大ハーンの使者が市を出発すると、どの道を通っても 40 キロごとにジャム（站）と呼ばれる駅舎に出会う。使者が利用するこれらの駅舎には宿泊用の大きくて立派な建物があり、そこには寝台と絹製の調度品のついた部屋があり、ほしいものは何でも支給される。王が泊まってもはずかしくないほどだ。ある駅では二百頭、ある駅では四百頭の馬が使者のために用意されているが、必要度に応じてそのように規定されているのだ。地方行政官庁所在地に通じる道路には 40 キロか 50 キロごとに駅があるが、大ハーンの領土内の主要な地方ではどこでも同じで、使者が道も家もない地方を旅行する場合でも、必ず駅がある。ただ間隔がやや長く、72 キロになることもある。

道のことでなく、使者への丁寧な対応振るも丁寧に説明しているが、これらはマルコ・ポーロ自ら大ハーンの使者としてあちこち旅した経験にもとづく貴重な証言である。ポーロの東方見聞録は、これに限らず、元朝による日本（チパング）襲撃（日本から見れば元寇）をモンゴル側から描いたり、ザイトゥン（泉州）での船の製造過程や船の特徴など当時の中国船を詳細に説明している個所など、他には見られない貴重な証言が多いのである。

オドリコからマンデビルへ：読む娯楽の誕生

マルコ・ポーロの見聞録が出版されると、ヨーロッパ人の東方・中国への興味をかきたてたことはもちろん、これ以降に旅する人たちや、見知らぬ国のことをもっと面白く創作しようとする人たちに読まれ、材料として利用された。桃源社の「東西交渉旅行全集」（全6冊）は、第3巻までが中世期のもので、第Ⅰ巻が前述のカルピニとルブルクの旅行記の全訳を掲載する「中央アジア・蒙古旅行記」（これは光風社から新版が出版されている）、第Ⅱ巻がオドリコ他の「東洋旅行記」、第Ⅲ巻がクラヴィホの「チムール帝国紀行」である。第Ⅱ巻にはオドリコの「東洋旅行記」のほかに、カンバリク（大都、現在の北京）の大司教に任じられて中国人やモンゴル人への布教に当たったモンテコルビーノ（1247～1328）の書簡など計6人の修道士の報告・書簡と、アルマリクで殉教したキリスト教徒の名前が掲載されている。アルマリクの殉教というのは、ラーナーによればp198、キプチャク・カン国のウズベク（1313～41）がイスラムに改宗すると、それ以降はモンゴルの伝統である寛容の精神が薄れてキリスト教徒は身の危険を感じるようになっており、1338年に至って、中央アジアのチャガタイ・カン国の首都アルマリクで、キリスト教宣教師やキリスト教徒の商人の大虐殺が行なわれた事件である。

モンテコルビーノは、教皇ニコラウス4世（在位1288～92年）によって布教のために中国に派遣された。最初インドに滞在したあと中国に向い、1294年にカンバリクに達している。マルコ・ポーロの「東方見聞録」が書かれた1298年に、カンバリクに最初のカトリック教会を建設して伝道に当たり、1305年に教皇クレメンス5世に申請してカンバリクの大司教兼全東洋の総大司教に任じられた。ただし、後任は任じられても赴任せず、彼一代でカンバリクのカトリック教会は終わっている。

「東西交渉旅行記全集」第Ⅱ巻に収められている書簡で最も新しいものは、マリニョリ修道士のものである（抄訳）。マリニョリは、1338年（アルマリクでキリスト教徒虐殺事件が起きた年）、教皇ベネディクトゥス12世（在位1335～42年）の命により、カタイ（中国）の大ハンへの返書を持ってカンバリクを訪れた。カンバリクに3～4年滞在し、大ハンはさらに長い滞在、あるいは永住することを勧めたが、時はすでに元朝末期の戦乱の風が吹き始めていた頃で、勧めを固辞して1345年暮にカンバリクを立ち、1353年にアヴィニョンに帰りついている。

これを最後に中国では元王朝の崩壊と明王朝の台頭、そして海禁（鎖国）へと動き、交流が途絶えることになる。とくに陸路はオスマン・トルコの登場で通過が困難になり、約100年に及んだヨーロッパとモンゴル・中国との交流は途絶えたのであった。

オドリコの「東洋旅行記」 マルコ・ポーロは商人であり、見聞したものを数量で表現したり、自分で直接見たものと他者に聞いたものを区別するなど、事実重点を置いて記述したが、地理や地誌に関心の薄いものにとってはかえって煩瑣で面白みに欠ける向きもあった。ラーナーはこの点について、ポーロの記述は「地理学者以外にはとてつもなく退屈

な代物だったはずであるし、そもそも地理学の学者など当時の西洋にはいなかった」と言っている(ラーナーp148)。そういうこともあって、マルコ・ポーロ以後の旅行者は「読者」を意識して面白おかしく、娯楽として読めるように工夫する者が多かった。中でも、ポーロにはば匹敵する長期の東方旅行を行なったフランチェスコ会修道士オドリコの「東洋旅行記」(家入敏光訳)がよく知られる。オドリコは1296年に31歳で西アジアに最初の伝道に出かけている。このときは短期間で戻ったが、1314年49歳の時、さらに遠方のアジアへの伝道に向う。ローマに帰国したのは1330年であるから、16年に及ぶアジア旅行と滞在を経験したことになる。帰国後同僚の修道士に旅行記を口述筆記させたものが「東洋旅行記」である。黒海からイラン、メソポタミヤ、インド、セイロン、インドネシア、中国と辿り、中国には1325年から3年ほど滞在している。

長大な旅行記であるが、その記述は未知の国を訪れた者が自分の国と違う奇習・奇風をことさらに書きたてているところがあり、あえて読者に面白く読ませようとしている風が明らかである。ノアの箱船が頂上に所在する山に登ろうとしたが、同志が待ってくれなかったから諦めた、というのはまともな方で、背丈が3指丈の小人族、父は子を食べ子は父を食べる国、婦人は全部共有の国、人肉を食べる民族、などを語る。致命的な毒を発する樹木があるが人糞を薄めて飲めば助かる、などということが実際にある話として語られる。さもないと、ひたすら敬虔なるキリスト教徒に現れる奇跡とか、異教徒の愚かさ・横暴さをなじる教訓的な話ばかりが並んでいる。いわば、庶民向けの童話やお伽ばなしの世界であるが、「船乗りシンドバッド」などのアラビアンナイトには到底及ばぬ内容で、オドリコが実際にカンバリクまで行ったという証拠がなければ、本当に旅したのかと疑われる体のものである。

おそらく、庶民にとっては、マルコ・ポーロのどことも知れぬ国の詳細で具体的な記述が延々と続く「見聞録」よりも、オドリコのおどろおどろしく、面白おかしい話のほうが受けたのであろう。見方を換えれば、オドリコも事実の見聞でないことは百も承知で、娯楽としておとぎ話を提供したのだとも考えられる。

マンデヴィルの「東方旅行記」 オドリコをさらに一歩進めたのが、中世のベストセラーになったマンデヴィルの「東方旅行記」(大場正史訳)である。手書き写本の時代のこととて様々な異本があり、作者も必ずしもはっきりせず、書かれた年代も不確かであるが、大場の解説では、内容との関連で1360年より少しあとに書かれたものであろうという。旅行記と銘打ってはいるが、実際に旅をした結果をまとめたものではなく、オドリコの旅行記をはじめ幾つもの先行の旅行記や地誌などの記述を援用して、巧みに奇習や怪異の物語を展開するフィクションである。大場によれば、「…ほとんど実用価値はゼロに等しいものである。作者の意図も初めから実用的な旅程の解説にあったのではなく、むしろ、東洋の未知の国々の奇々怪々なる珍習異聞をまことしやかに語って、読者をエキゾチックな幻想の世界に案内し、異国情緒を満喫してもらうことにあったようである」(大場)。P281

佐藤彰一・池上俊一「西ヨーロッパ世界の形成」(世界の歴史 10)によると、12世紀半

ばから 13 世紀にかけて、俗語であるイタリア語やフランス語、英語、ドイツ語が、かつての規範語であったラテン語にとってかわり、文書主義が公的な文書だけでなく、市民の契約や商取引にも入り込み、「文字」の知識の重要性がそれまで「声」によって律せられていた社会関係を転換させる時代になっていたという。このことは市民の娯楽にも影響を及ぼし、ファブリオ（滑稽譚）やパロディー、ファルス（笑劇）などによる笑いへとつながり、他方では、小説というフィクションの世界をも準備していたのだという。佐藤・池上は「中世では、虚偽（フィクション）をそのまま目的としてフィクションを書くものはいなかった。フィクションを書くには、高度な修辞の知識とテクニックだけではだめで、故意に空想の世界を作る新たな創作態度が必要であった」と書き、小説の誕生について考察している。イタリアの「デカメロン」（ボッカチオ、1348～53 年頃）やイギリスの「カンタベリー物語」（チョーサー、1387～1400 年頃）、フランスの「小姓ジャン・ド・サントレ」（アントワヌ・ド・ラ・サル、1456 年）などがその嚆矢とされる。

ラーナー（p177）によれば、マルコ・ポーロの「見聞録」は 1370 年頃から人気が始まり、これにとって代わったのが 70 年ほど後のマンデヴィルの「東方旅行記」であった。ポーロの「見聞録」は中世の写本が 150 冊ほど残っているに過ぎないのに対し、マンデヴィルは 300 冊以上見つかっている。マルコ・ポーロの見聞録はいわば学術書で、娯楽作品でもフィクションでもなかったからであろう。

マンデヴィルの「東方旅行記」は、散文小説という知的娯楽がまだない時代に、フィクションによる旅行記という《読む娯楽・読んで聞かせる娯楽》を提供した記念すべき作品であった。見知らぬ国への旅の物語はそれ自体が面白く、後代の「ロビンソン・クルーソー」（1719）、「ガリバー旅行記」（1726）、さらにはジュール・ベルヌの「月世界探検」「海底 2 万マイル」「八十日間世界一周」などなど、旅を材料にしたフィクションからサイエンス・フィクションにまでつながる諸作品の、先駆的な作品であったと言えそうである。

いずれにしても、14 世紀には東方にオスマン帝国が進出して往来の自由は過去のものとなり、中国の元朝も 1368 年には崩壊する。使節も、伝道も、商業でさえも、東方とヨーロッパを直接結ぶことが稀になる。代わって「演出された奇譚」が東方情報をヨーロッパ人に提供することになり、それらによって誇張された東方のイメージが、やがてヨーロッパ人をして海という迂回路を経たアジア・ルートに導いていくことになるのである（樺山「異郷の発見」 p 78）。